

保育計画(新規事業計画)成果報告書

法人名等	学校法人 森本学園
施設名	認定こども園 高須幼稚園
報告者（役職）	森本 真行（園長）
住所・連絡先	高知県高知市高須本町 1 1 - 1 2
	☎ 088-883-2319 E-mail takasu@shirt.ocn.ne.jp

○タイトル（保育計画 or 新規事業計画）

つながる、つなげる！水遊びと食をつなげる田んぼビオトープ

○主な助成備品

幼児用手押しポンプ及び田んぼビオトープ

1. 保育計画(新規事業計画)策定の目的

高須幼稚園（以下「本園」）は、四国の高知県高知市の中心部と東部の間に位置し、南には高須山があり、北は舟入川が流れる静かな環境の中で約50年に亘り保育、幼児教育を行ってきた認定こども園である。対象は0歳児（6ヶ月～）から5歳児の乳幼児で、「支え合う子どもたち」を教育・保育目標とし、主に子どもたちの自主性を重んじる「見守りの保育」、集団生活の中でお互いを思いやる「心の芽生え」、色々な自然物とふれあうことで豊かな感性を養う「本物との出会い」を大切に、日々の保育に取り組んでいる。

また、本園は木育や自然体験活動を主な活動の一つとしており、林野庁の定める「ウッドスタート宣言園」の他、公益社団法人日本シェアリングネイチャー協会が認定するネイチャーゲームリーダーが多数在籍するなど、子どもたちの健やかな育ちにつながるよう、より幅広い知見を求めて積極的に取り組んできた。

これらの背景を踏まえ、当事業における保育計画策定の目的は、以下の3点である。

1つ目は、本園の取り組みである「本物（自然物）との出会い」について、園庭に田んぼのビオトープを設置することで、田んぼに行く機会の少ない乳幼児たちが、田んぼに集まる生き物たちにふれあう機会を創出すること。2つ目は、稲が育つ様子を日々間近で観察することで、本園が推進する食育につなげること。3つ目は、子どもたちが、幼児用手押しポンプから雨どいを用いて隣接する田んぼビオトープや赤土山、砂場への水の引き込みを行い、夏の前後に行う水遊びとも連動させることで、子どもたちの協働性、協調性、創造力を養うことである。

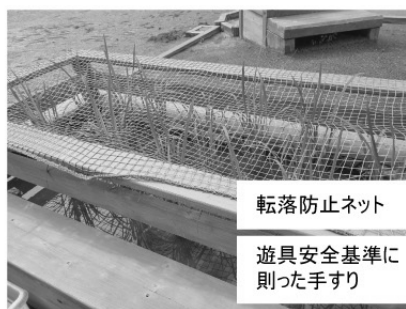
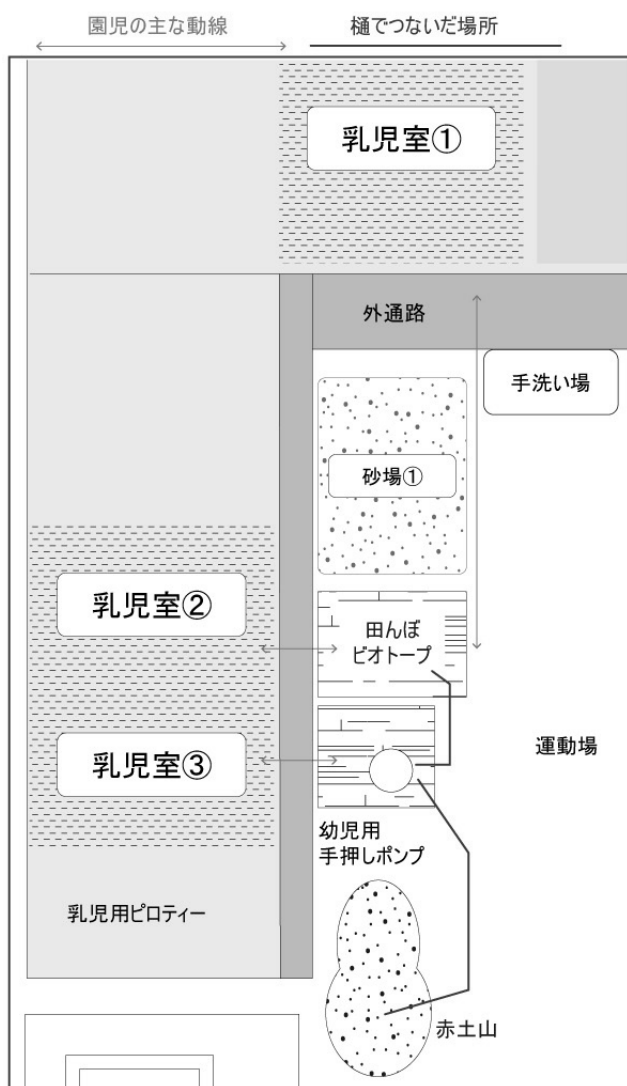
また、水遊びが、どろんこ遊びなど様々に発展することで、子どもたちの五感を刺激することも同時に期待した。

2. 具体的な実施内容

① 幼児用手押しポンプと田んぼビオトープの設置

幼児用手押しポンプ（以下「ポンプ」）と田んぼビオトープ（以下「ビオトープ」）を実施するにあたり、最初に設置場所について、職員だけでなく園庭整備の経験のある事業者を交えて入念な検討を行った。その際、それぞれが園児の動線や既存の遊具と干渉しないことに注意しつつ、ポンプは、水遊びとの連動を視野に、赤土山や砂場に樋を使った水の引き込みが可能な位置とすること、ビオトープは、乳児用保育室からビオトープが見える位置に設置することを要件として検討を重ね、下図の内容での配置を決定した。ポンプの選定においては、乳幼児が指をはさんだりする隙間がなく、水の給排水を保育者側が制御できるよう、直接ポンプに給排水管を引き込めるタイプを選定し、ビオトープにおいても乳幼児がビオトープ内に落ちたり頭を挟まないよう、手すりの幅や高さを設定した。

尚、ビオトープ内の土は、実家が農業を営む職員の田んぼから土嚢袋（9袋）を使い搬入した。



②子どもたちの姿

施工が完了した際、ビオトープは田植えの時期ではなかったことから、水を張るのみとし、まずはポンプの運用から始めた。また、子どもたちの育ち合いの姿を期待し、年長児から使い始めることとした。

・ 幼児用手押しポンプ編

年長児の子どもたちは、はじめはポンプのレバーを押すと水が出ることを楽しんでいたが、次第に色々なことを試すようになり、バケツを持ってきて水を入れ、隣の赤土山のでっぺんに空いていた大きな穴の中に流し込むようになった。さらに、バケツに水をためる作業が一人では難しいと考えるようになり、ポンプ押し係とバケツ調整係に役割分担をするようになった。次第にポンプで水を出すことから赤土山の大きな穴に水をためるということに目的が変わり、どうすればもっと早く赤土山の穴に水をためることができると考えるようになった。そこで、子ども達は、傍にあった樋を持ってきてポンプと赤土山を樋でつなぎ、水が穴に向かって流れていくように水路を作った。しかし、傾斜が足りず水が流れないことに気づくと、丸イスを樋の下に置くなどして傾斜を出そうとするようになり、子ども達は、丸イスの数や高さを調整するなどの試行錯誤を楽しんでいた。水が穴に届くと歓声があがり、子ども達は、自分たちが考えたことをやってみた結果、成功したことを喜び、満足する姿があった。

年中児は年長児の遊んでいる姿を見て一緒に遊んでいたため、同様にポンプで水を出す行為からバケツに水をためて赤土山に運ぶことを楽しんでいた。その際、保育者がポンプの排水溝を閉じたことで水がたまるようになったので、足を水たまりにつけたり外に飛ばしたりして楽しんでいた。年少児も、ポンプのレバーが少し重かったが、自分で動かしたいという思いが強く、友達と協力して押す姿が見られた。ポンプのレバーを押すと水が出るという現象がとても楽しかったようであり、子ども達の新たな夏の水場となっていた。2歳児以下の子どもたちは、ポンプから出た水を手でうけたり、下にたまった水に足をつけたりして遊ぶ姿が見られた。



左/中：樋にビールケース等で勾配をつけ赤土山に水を引き込む子どもたち
右：ポンプを押す係が交互に入れ替わりながら水遊びを楽しむ子どもたち

・田んぼビオトープ編

今年初めての取り組みということもあり、池の中で米の苗が育つということが浸透しておらず、何か生き物が暮らしていないかということに関心が向けられていた。その後、カエルが卵を産んでいたため、池の中にはオタマジャクシが沢山泳ぐようになり、小さい子どもたちを中心に池の中を覗き込む姿が見られるようになった。

5月の終わりごろになると苗を植えることになり、田植えを年長児が行った。その際、お米作りに詳しい職員が、絵本やサンプルを持ってきて苗の育ちや田んぼに集まる生き物についてお話をした。稲が育ってくると近くで遊んでいた子ども達が稲穂を触ってみたり池の中を覗き込んだりするようになり、稲穂が出ると、それに気づいた子ども達が友達や保育者に知らせて、喜んだり驚いたりする姿が見られた。

稲刈りは田植えと同様に年長児が行った。今年は夏の酷暑もあって実りが悪かったこともあり、刈り取った稲はクラスに持ち帰って観察することとした。



左：米の成長や田んぼに集まる生き物の話をする様子

中：実際に田植えを行う子ども達 右：田植え後の苗と転落防止ネット

3. その成果と評価

・幼児用手押しポンプ

幼児用手押しポンプの設置によって、年長児の水遊びも樋を使ったダイナミックな遊びへと変化した。その変化は、その後の砂場遊びにも波及しており、砂場、赤土山、ポンプといった異なるフィールドで各々が樋やビニールパイプ、ホースなどの色々な道具を組み合わせ遊ぶようになった。本園におけるポンプ設置は、当初期待された以上に子ども達の創造力を高め、それぞれが意見を出し合うことによって主体的な学びへとつながったと思われる。また、それを見ていた年中児や年少児も一緒になって遊んでいたことから、異年齢での関わりのきっかけになるなどの成果が見られた。また、園庭に新たな水場ができたことで、特に夏の暑い時期の水遊びの起点となっており、乳児にとっても水とふれあう場所としてそれぞれの発達に応じた遊び方ができていた。

田んぼビオトープとの連動においては、赤土山へ水を引き込んだ経験を活かしてビオトープに水を引き込んだことで、水耕栽培の感覚的な理解も深まったと思われる。

- ・田んぼビオトープ

設置当初は水を張っていたのみであったために、子ども達の関心も薄れていたが、ビオトープ内にオタマジャクシが泳ぎ始めると、再び子ども達の関心が向けられるようになり、自然や生き物に親しみを持って日々の観察を行うことができた。設置場所を乳児室の前にしたことで、保育者が乳児たちとビオトープ内を覗きながら生き物の話をしたり、雨の日でも保育室からビオトープを眺めることができ、自然が身近にある保育環境を実現することができた。

4. 今後の課題と展望

- ・幼児用手押しポンプ

ポンプ単体では遊びが固定化されてしまうため、特に試行錯誤をすることが面白くなってきた年齢の子ども達には環境の工夫が必要であると共に、保育者の関りについても目的を明確にし、共有することが課題である。また、今後どろんこ遊びなどの赤土山と連動した遊びを行うには、排水溝が詰まり、子どもの遊びが中断されてしまうため、ネット対策をするなどの対策が必要である。

- ・田んぼビオトープ

設置から田植えまでの期間が長く、生き物探しなど子ども達の関心を維持することが困難であった。また、生育が天候や気候にも大きく左右されることから、苗のみを植えた田んぼとしてではなく、より生き物が集まりやすい標準的なビオトープとして運用しつつ、ビオトープ内の一角に苗を植えるなど、一年を通じて活用できる保育的視点を重視したバランスが今後の課題である。

- ・今後の展望

今年度に得られた成果と課題をふまえ、どのようにすれば一年を通して田んぼビオトープを有効に活用できるかを職員間で議論し、より多くの生き物が集まるビオトープとして運用を目指すとともに、幼児用手押しポンプについても、ポンプでの遊びにとどまることなく、樋やホースなど様々に応用することによって、子ども達の創造力や主体的な学びにつながるよう活用していきたい。

以上